



Vol.52

2026年2月17日

日本災害復興学会

# News letter

## 目次 -contents-

1 2025阪神大会・開催報告  
山 泰幸

2 「復興」の今  
—熊本地震10年、東日本大震災15年—  
日常の中にある復興  
佐々木 康彦

ホムアップの拠点づくりと創造的な復興。～石巻から～  
勝 邦義

4 能登復興実践研究交流会  
高原 耕平

5 未災地への伝言  
震災遺構をめぐる狂騒的な日々から15年  
坂口 奈央

6 復興スケッチ  
桜と模型と地域再建  
中島 みゆき

7 復興若者通信  
葛尾村で居候する中で見えてきたもの  
田村 拓己

震災から21年、木沢集落を持続可能な里山へ  
中林 夏希

8 法制度と現場  
秋之原市における官民連携の被災者支援活動報告  
植松 真樹

味な復興  
遅くなった炊き出し  
魚住 由紀

発行人 天野和彦  
〒662-8501  
西宮市上ヶ原一番町1番  
155号 関西学院大学災害復興  
制度研究所気付  
TEL:0798-54-6996  
FAX:0798-54-6997  
http://f-gakkai.net/

※学会現況 (2026年2月4日現在)  
現在の会員 463  
正会員 401・学生会員 58  
購読会員 1・賛助会員 3

## 2025阪神大会・開催報告

大会実行委員長(関西学院大学災害復興制度研究所長) 山 泰幸

2025年10月10～12日に、2025年度大会が兵庫県西宮市にある関西学院大学で開催されました。関西学院大学での開催は、2008年1月の学会設立大会以来17年ぶりとなりました。阪神・淡路大震災から30年目の節目にあたり企画した10日(金)のエクスカージョンは、認定NPO法人まち・コミュニケーションの主催により、スライド講話と御蔵地区まち歩きツアーを通じて30年間の復興の歩みを実感していただきました。

11日(土)は、計6つの分科会が開催されました。午前中は「能登半島地震における復興に向けた課題と新たな復興法システムの構築」、「阪神・淡路大震災の災害復興から30年～都市づくりから人へ、災害復興における『決めきれなさ』と向き合う力ーネガティブ・ケイパビリティと生活再建の可能

性」の2つが開催されました。午後は「能登半島地震被災地の住民主体・参画による復興を考える(地域力が疲弊、縮小するなかで南海トラフ地震等巨大災害への備えを考える)」、「三宅島の火山災害と長期避難の経験から考えるー広域避難・離島防災・子ども支援のこれから」、「みやぎボイスを源流とする被災地対話連携実践研究会 ラウンドテーブル voiceのvoicesをvoiceする」、「災害復興の再考:多義的なケアの視点から」の4つが開催され、それぞれ活発な議論が交わされました。分科会には116名にご参加いただきました。夕方には全体会を開催し、各分科会の成果を共有しました。交流会には53名が参加し、熱心な意見交換がなされました。

12日(日)午前の研究発表会では3室に分かれて口

頭発表が行われ、116名にご参加いただきました。午後の公開シンポジウムは「阪神・淡路大震災30年シンポジウムー国難災害にむけて、その知的遺産をいかに活かすかー」と題して開催されました。山中茂樹特別顧問による基調講演『創造的復興は国難を救う理念となるか』の後、山泰幸関西学院大学災害復興制度研究所長の司会で、井戸敏三元兵庫県知事、室崎益輝神戸大学名誉教授、磯辺康子元神戸新聞記者、津久井進弁護士をパネリストに迎え、阪神・淡路大震災の経験と教訓を今後の国難災害にどう活かすかについて、深い議論が展開されました。

開催にあたりご協力いただいた関係者の皆様、ご登壇いただいた皆様、参加していただいた皆様、スタッフの皆様へ深く感謝申し上げます。

## 日常の中にある復興

故郷復興熊本会議 佐々木 康彦

2016年4月に発生した熊本地震から、10年という歳月が流れようとしています。最近では、かつて頻繁に見られた熊本地震関連の報道も少なくなりましたが、節目の年を迎えるにあたり、あらためてそのことを実感する機会も増えてきました。そして、熊本地震をきっかけに熊本へ移り住んだ私自身の熊本での暮らしも、まもなく10年を迎えます。

以前は中越地震の復興に携わっており、熊本地震の発災後、支援に入ったことを契機に、現在も熊本で細々とではありますが活動を続けています。発災後およそ5年は、常に熊本地震からの復興を意識し、地域がこれからどうなっていくのかを考えながら仕事に向き合ってきました。しかし、ここ最近では、地震のことを強く意識せずに日々を過ごし、物事を考える時間も、徐々に増えてきたように感じています。

前震、本震と立て続けに襲った激震は、尊い命を奪い、多くの住まいと日常を破壊しました。益城町や南阿蘇村、西原村をはじめとする被災地では、避難生活の長期化、インフラの寸断、地域コミュニティの分断など、これまで想定されてこなかった課題に直面

しました。しかしこの10年、住民、行政、ボランティアなど多様な主体が連携し、復旧・復興に向けて歩み続けてきた結果が、今の熊本の姿です。

熊本地震の大きな特徴の一つは、多様な主体が関わり合いながら復旧・復興に取り組む姿が、各地で見られたことでした。発災直後の応急期には、公的支援が行き届くまでの間、地域の自治会や消防団、近隣住民同士が声を掛け合い、安否確認や物資配布を担いました。避難所では、被災者の中から自然発生的にリーダーが生まれ、トイレの清掃当番や配食、情報共有の仕組みが整えられていきました。

全国から駆け付けたボランティアは、ボランティアセンターを通じた活動にとどまらず、農業ボランティアなど生業の支援にも入りました。また、ボランティアの知見を共有する中間支援的なネットワークも生まれています。復興期に入ると、益城町のまちづくり協議会や西原村での集落再生会議など、住民と行政が二人三脚で集落単位の復興を進める取組も行われてきました。その後の災害では、かつて支援を受けた住民が、今度は支援する側として関わる姿も見られ

ます。こうして10年を振り返ると、熊本は過去の被災地の経験を活かし、さらにそれを次の被災地へとつなぐ復興の道を歩んできたのだと感じます。

10年経った今、あらためて周囲を見渡してみても、熊本の風景の中に当時の甚大な被害の面影を感じることは、ほとんどなくなりました。美しく復旧された道路を走る車、通学する子どもたち、観光客を乗せて走るトロッコ列車、被災後に復活した地域の行事など、当たり前の日常が穏やかに積み重なっています。その一つひとつが復興の成果であり、同時に「復興」という言葉が、特別なものとして意識されなくなってきた証でもあります。

復旧事業も、益城町における区画整理事業と、農業用ため池である大切畑ダムの復旧事業を残すのみとなりました。ニューズレターが発行される頃には、大切畑ダムも完成する予定と聞いています。インバウンドによるオーバーツーリズムや、TSMCの進出がもたらすメリットとデメリットが語られる現在の熊本では、震災復興とは異なる文脈で、「これからの熊本」をどう描くかが日常の話題となりつつあります。

熊本地震から5年を迎えた頃には、10年に向けて何が必要かを考える機会が数多くあ

りました。しかし10年を迎える今、15年、20年に向けて「復興」という文脈で何かを考える機会は、大きく減ってきたように感じます。中越地震から10年を迎えた2014年、私はまだ新潟にいました。当時の中越では、「復興は人口減少や高齢化とどう向き合うのか」「地域の持続性をどのように確保するのか」「復興に終わりはあるのか」といった問いが、盛んに語られていたように記憶しています。

中越と熊本では、置かれている状況も時代も異なるため、単純に比較することはできません。しかし、二つの「10年目」を思い起こすと、同じ時間でありながら、その進み方の違いに、少し戸惑いを覚える自分がいます。

熊本では一足早く、被災地としての特別な日常から、普段通りの日常へと戻ることができました。何か特別なことをすることだけが復興につながる道ではなくなってきたのかもしれない。熊本地震から10年という時間は、復興が平穏を取り戻した日常の中に、静かに溶け込んだことを示しているのだと思います。そのことに安堵を覚える一方で、小さな不安も感じています。日常に埋もれつつある経験を次の10年に活かすことをこれから考えていきたいです。

## ボトムアップの拠点づくりと創造的な復興。～石巻から～

勝邦義 建築家／一般社団法人ISHINOMAKI2.0理事

創造的な復興という言葉は阪神・淡路大震災後の神戸から生まれたという。災害で失われたものを災害前の状態に戻すことを主眼とする「復旧」に対して「創造的復興」は被災前よりもベターな状態を目指す。来たるべき未来に備えて復興期に社会を変えるような変革とポジティブな創造が加わることだ。

この「創造的復興」と「復旧」は復興予算の振り分けの際の明確な線引きのために持ち出されることが多い。原則的に復興予算は「復旧」のために限定される。公平性や早急性が求められる復興予算に対して、明確な用途を定義するのに有用な区分である。言い換えれば、創造的復興は制度や予算の枠外に置かれてきたとも言える。

復興が進む石巻で学んだのは、そうした枠外にある草の根の実践を、小さな空間から積み重ねていくことの重要性だった。復興期の場づくりは、資金にしても、そこにかける労力にしても皆で持ち寄ることから始まる。まちに楽しくお酒を飲める場所がないなら自分たちでつくってしまおうと、DIYを駆使して2011年7月に始めた「復興

バー」は、その象徴的な例である。ただ設計して終わることだけでなく、限られた予算の制約から専門家に任せ施工する部分と、運営する人たちで簡単なDIY作業を通じて拠点を完成させることも多かった。そうすると自ずと施工に伴うイベントも設計することになる。その際に様々なまちの人たちを巻き込んでいくことで結果的に建築に関わる人の能動性が高くなる。

石巻の商店街で12年以上続けている本スペース「石巻まちの本棚」にしても、定着したのはそのような手法があったからだ。震災から1年後の2012年に石巻のまちなかで「石巻一箱古本市」を企画した。参加者たち各々がひと箱の本を持ち寄り、商店街に皆で1日だけの大きな本屋さんをつくり石巻内外からたくさんの参加者が集まった。それまで被災者支援の名目で開催されていたイベントとは一線を画し、静かながらも熱く、本を通じてまちなかに人がにぎわう姿に、確かな手応えを感じた。日常的にこのような景色が生み出せれば。かつての書店だった空きビルではじめたのが、本の拠点「石巻まちの本棚」だ。



これらの拠点に共通していることは活動を通じて、場所に能動的に関わる人たちを生み出し、そうした人たちとのかたちを変えながら続けることだ。

まちなかに開いたオープンオフィス「IRORI石巻」は2011年にスタートし2016年にカフェスタンドを加えてリニューアルし再出発した。前述した「復興バー」は2024年に「FKB」と名前を変えて、ここにしかない本格的なドリンクを提供するカジュアルなスタンドバーに変貌した。

まちなかに位置する最後の映画館だった「日活パール」はソーシャルファームの実現に取り組む農業法人が買い取り、かつて銀幕が備えられた劇場はステンレスタンクが整備されクラフトビールの醸造所へと姿を変えた。そしてまちなかに映画館が消えたことに強い危機感を抱いた若者は、その隣の布団屋だった空き家を改装して手作りの劇場「シアターキネマティカ」をオープ

ンさせ、まちの文化の灯を再び灯すことに尽力している。

震災以前から経済的な縮退を経験してきた石巻の中心市街地で、これから都市文化はどのように生まれるのか。その問いに向き合うとき、思い浮かぶのはこうした小さな拠点と、そこに関わってきた人々の顔である。

近年、過大な創造的復興を目指した事業者が、コロナ禍を経て次々と事業を終了する事態が目立ってきている。一方で、創造的復興の過程で、震災前より事業規模をスリムにしたり、活動を先鋭化させたりした事業者は、形を変えながら存続している。創造的復興において重要なのは、適切なサイズへの調整と、変化に対応できる柔軟なチームづくりである。規模の小ささと変化しやすさを内包したそれら拠点からの実践こそが、ボトムアップのまちづくりに確かな変化をもたらす。そのことを、石巻での経験から実感している。

# 能登復興実践研究交流会

金沢大学 能登里山里海未来創造センター 高原 耕平

2025年11月23日、企画委員会の令和7年度企画として「能登復興実践研究交流会」を金沢大学にて開催しました（主催=日本災害復興学会企画委員会、後援=金沢大学能登里山里海未来創造センター）。令和6年能登半島地震および同年9月奥能登豪雨の復旧復興に関わる実践・研究に携わる方々が一つの場所に集い、お互いに活動報告をすることで「ヨコ」の繋がりを増やす。これが本交流会の企図です。参加呼びかけの文章を再掲します。

「2024年の地震と豪雨、二重の苦難を被った能登半島のひとびとと町は、少しずつ少しずつつ力を取り戻し、生活を立て直しています。その回復と再建の核には被災者自身の努力と忍耐と協力があり、内外の支援者の息の長い活動がそれを後押ししています。ひとりずつ、一軒ずつ、一集落ずつ、息を吹きかえそうとしています。／日本災害復興学会企画委員会の令和7年度企画として、能登半島に関わっている支援者同士の意見交換・交流の場所を開きたいと思えます。普段は広い能登のあちこちで活動している実践者や研究者が、事例や課題や可能性

を共有する場所です。語れば具体化し、つながれば力が出来ます。／能登半島の復興に関連するものであれば、支援実践や調査報告など広く受け入れます。学会員枠と非会員（地元枠）を設けます。研究者、院生学生、支援団体関係者、報道関係者など、発表者資格は設けません。もちろん被災当事者も。／語りましょう、つながりましょう！」

目指したことはこの文章に尽きるのですが、発案の背景として、多くの有意義な活動が広い能登半島で分散してしまい、つながりを持たずに各地で完結してゆくことへの危惧がありました。特に、地域や分野や世代、また研究者・民間企業・NPOなどセクター間の交流が鍵だと考えていました。日常の支援活動や調査活動では、どうしても似通った分野やセクター内のつながりにまどまってしまう傾向があるからです。知らない人どうしても、会って話せば必ず新たな何かが生まれる。部屋にこもって研究ノートをちまちま作って満足しがちな自分が言うのも奇妙なことです。この確信がありました。語れ、つながれ、それ抜きで「復興」はできない、と。

交流会は「ミニ学会大会」

形式を採り、発表者1組あたり質疑応答含めて15分の時間を設定しました。発表は2会場同時進行で、各発表セッションの司会は企画委員および金沢大学に在籍する若手学会員にお願いしました。参加者と発表内容についてはできるだけ間口を広くするという意識を

しました。これらのスタイルの選択には、東日本大震災・原子力災害伝承館が事務局となり近年開催している学術研究集会の成功が念頭にありました。

当初は金沢大学現地のみでの開催を計画しました。しかし、学会での告知から締め切りまで期間が短かったことや、三連休観光シーズンに重なった為か市内の宿泊施設料金が高騰するなどの課題があり、途中からオンラインでの発表と聴講を可能とするハイブリッド形式に変更しました。結果的にはこれが功を奏したようで、現地発表者21、遠隔発表者8、現地聴講者12、オンライン聴講者24という参加人数に結実しました。



休憩時間中に意見交換する参加者



B会場での発表



A会場での発表

ハイブリッド開催に躊躇なく切り替えることができたのは、会場としてお借りした金沢大学未来知実証センターの最新設備があったからです。

参加者間やセクター間の交流という当初の意図はいくらかは実現したようで、報告者が知る限りでも4件の新しい動きがこの交流会から生まれ始めているようです。こうしたつながりの厚みが、中長期の被災者支援にじわっと効いてくるのだと信じています。個々にお名前を上げる紙幅が無いのですが、発表・参加・協力いただいた皆様に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。これからも一緒に取り組んでゆきましょう。

## 震災遺構をめぐる 狂騒的な日々から15年

岩手大学 坂口 奈央

ちょうど1年前に、震災遺構に関する初の専門書となる単著が発刊された（『生き続ける震災遺構—三陸の人びとの生活史より—』ナカニシヤ出版）。本書では「震災遺構」を、一般的に言われてきたような「負のシンボル」とか、防災や教訓のために保存すべきという、外部の人たちから与えられた公的記憶としての遺構をめぐる論調に対し問題提起した。

この15年を振り返ると、「震災遺構」をめぐる沸騰した日々は、一過性の出来事に過ぎなかったのか。興味がなくなったら使い捨てられてしまう、ただの消耗品なのだろうか。三陸を舞台にした「震災遺構」をめぐる社会の動きは、狂騒的だった。もし節目の今年、三陸に思いをはせる心の余白ができれば、三陸の人びとを被災当事者とだけ捉えるのではなく、三陸に生きる生活者として捉え直してみたい。これまでの議論とは異なる「震災遺構」の姿が見

えてくる。

三陸の人びとの語りには、「震災遺構」を見るたびに葛藤し苦悩し、揺らぎながら人々が三陸でこれからも生きていく意味のかけらを集めていく復興への道のりがよく表れていた。例えば岩手県大槌町では、町長と役場職員28名が犠牲になった旧役場庁舎のあり方をめぐり、「恥の場だから解体すべきだ」と一見耳を疑う語りが表れた。それは、怒りとともに語る町民や、自責の念にかられながら、自身の人生を問い直しつつ、とつとつとただ静かに語る町民もいた。宮城県気仙沼市鹿折地区に打ち上げられた巨大な漁船、第18共徳丸が陸に残されていた2年半の間、観光バスや興味本位で群がる人たちを尻目に、「船がかわいそう」と思いながらも、言葉にできずにいた住民がいた。彼らにとって「震災遺構」とは、海に翻弄された人生を投影する鏡のような存在だった。詳細は拙著をお読

みいただきたい。

現在、公的に保存が決定され、公園などの一角に整備された「震災遺構」は、公共空間に位置している。その多くは海に近く、当然ながらその周辺で生活している人はいない。人びとの息づかいが漂う生活感はずっかり消臭され、めったに人が訪れなくなってしまった所もある。

例えば、キャンプ場だった岩手県宮古市にある震災メモリアルパーク中の浜には、炊事場とトイレが保存された。周辺に漁港や海水浴場もあるものの、軽トラがたまに走り去る程度である。岩手県陸前高田市内には、祈念公園内に4施設と一本松が「震災遺構」として保存、伝承施設として整備され、さらに公園の海側には擁壁のようにそびえたつ12mの巨大防潮堤がぐるりと囲う。

来訪者による花を手向けたり、防潮堤の上に立つ姿がたびたび確認されるが、陸前高田に暮らす人びとにとっては、いまだにそばに近寄れない人もいるほどで、ましてや手を合わせたりする場ではない。三陸に生きる生活者と外部の人たちのまなざしは、乖離したままにある。

「震災遺構」として残った以上、人間の寿命を超えた時間を生きていく。それは、過去、現在、未来という時間を架橋し、被災の経験も、社会的、時間的な違いをもつ自他の間に新たな意味を育む可能性を秘めている。しかし意味が宿らなければ、語られる「震災遺構」にはなり得ない。ただあるだけでは意味がない。語られ、意味が生まれ、公共の空間となり得るのか、今岐路にたっている。



震災メモリアルパーク中の浜 (2025年6月27日 筆者撮影)

## 桜と模型と地域再建

東京大学大学院情報学環 中島 みゆき

1月18日昼、石巻市河北地区の道の駅「上品の郷」では「セリ鍋コンテスト」が開かれ、テント前に長蛇の列ができていた。市内6店が自慢のセリ鍋を出品。参加者は400円払って食べ比べ、一番おいしいと思う店に投票する。

この日は午前中、15キロ離れた震災遺構大川小学校で語り部ガイドが開かれ、参加者も誘い合わせて列に並んだ。セリは地元の特産で、復興や町おこしへの思いも込められている。

国道45号線の反対側にある集団移転地・二子団地では、大川地区から移転した阿部良助さんの遺影が窓際に置かれ、にぎわいを笑顔で見守っていた。阿部さんは大川小のある釜谷の区長を長く務め、地域再建に奔走した。

不明者の搜索、墓地の再建、仮設住宅への入居……集団移転地のまちづくり協議会でも住民代表を務めた。震災10年を迎えたころから徐々に体調を崩し、昨年9月に入院先で息を引き取った。78歳だった。

阿部さんは1947年、釜谷の隣、間垣地区の農家の三男に生まれた。中学卒業後、千葉県柏市などで修行して大工になった。地元に戻り25歳で

大川小近くに住む妻・文子さんと結婚し、釜谷の住人となった。

震災の日は、市内で仕事をしていた。文子さんは無事だったが、孫の菜桜さん(当時10歳)と舞さん(同9歳)は大川小で亡くなった。3月13日から搜索に入り、菜桜さんを見つけた。日中は搜索、夜は役場(石巻市河北総合支所)で会議をする日が続いた。

そんな阿部さんの姿をテレビで見た岩手県内の僧侶から連絡があり、11月に再建間もない墓地に桜を植えた。以来、長野県戸隠の桜守やボランティアの協力を受けて植樹を続け、5年後には釜谷地区と大川小学校で犠牲になった人数と同じ269本まで植樹した。毎年春には、桜の手入れと花見の会が催されてきた。

被災前の地域を模型に残す活動にも邁進した。集団移転が具体化してきた2015年秋、「大川に住んでいたことを形に残したい」「ジオラマみたいなものがつくりたい」という声が、津波で家を失った住民の間から出てきた。2016年1月に被災地で模型をつくる「失われた街」プロジェクトを主宰する神戸大の槻橋修准教授(当時)が大川地区を



大川震災伝承館に初めて地域の模型を展示し、かつての自宅を臨む窓の前で妻・文子さんと語らう阿部良助さん=2021年11月27日

訪れ、話が具体化した。

同年11月に最初の模型制作ワークショップを開くことが決まると、会場確保や住民間の連絡、資材の輸送、役場との調整など、精力的に動いた。神戸や名古屋から集まった学生たちに親戚の子どものように接し、帰り際にそっと小遣いを手渡す場面もあった。

4集落・39㎡と、東日本大震災被災地で最大級の模型をつくった後も、毎年夏に模型を展示するイベントを開いてきた。大川小近くに模型を展示するために建てたプレハブには、阿部さんを慕うボランティアが定期的に花を植えている。昨年8月の模型展示の際も、病床から地域の人に電話して段取りを気遣った。

ぶっきらぼうで、決して自分を表現することが上手な人ではなかった。しかし阿部さんの周囲には常に人がいた。そして、精力的に動き続けた。原動力は何だったのか。文子さんに訪ねると、「孫を亡くして、何かをしてなくっちゃという気持ちがあったのでは」という答えが返ってきた。

復興行政や制度について、阿部さんから不満を聞いたことはない。一刻も早く地域の人の暮らしを取り戻したい、その一心だったのだろう。使えるツールを使い、突き進んだ。「一つ一つ、片付けていくしかねえんだ」が口癖だった。

そうした姿勢は時に、行政と対峙する大川小遺族との間に軋轢を生むこともあった。ただ、一度だけ聞いたことがある。仮設住まいのころ、移転地のまちづくりについて話し駐車場まで私を見送りに出る玄関先で、「30年先のゴーストタウンつくってんだ」と。小さな声でつぶやいた。

8年にわたり仮設で暮らし、移転地に地域の人の家を建てた後で自宅を建て入居した。移転時期とコロナ禍が重なり住民間のつながりが希薄になった。そんな中で阿部さんは、住民に声をかけ草刈りをしてきた。草刈りは新年度から業者に委託される。釜谷の桜は寒さの中つぼみをつけ、4月には花見の会が開かれる。

## 葛尾村で居候する中で見えてきたもの

明治大学 情報コミュニケーション学部 田村 拓己

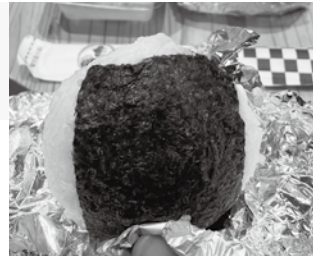
私が福島県葛尾村と出会ったのは、2023年8月のことだ。もともと災害の社会学に関心を抱いていた私は、当初「原発被災地」という文脈からこの村に興味を持った。そして、いきなり現地を訪問し、それ以来、葛尾村に通っては特段何をするわけでもなく、数週間「居候」するような生活が始まった。

当初の学術的な関心をよそに、私はいつしか葛尾村という土地そのものや、そこに暮らしを紡ぐ人々に惹かれていったのだと思う。村民の方々の家を泊ま

り歩き、酒を酌み交わし、祭りなどの地域行事に参加する。誰かから目的や意味を求められるわけでもなく、自分でもうまく説明できないような豊かで尊い時間。それは私にとって、東京とは違う「居場所」をいただいたような気分になった。現在は、葛尾村と避難先を日々行き来しながら生活する村民の方々に注目し、卒業論文の執筆に励んでいる。お話を聞くと、「通い」の生活をされる方々は、多くの困難があっても故郷との関わりを持ち続けたいと願い、そこに「在りた

き姿」を追い求める、希望に満ちた「通い」の生活がある。その一方で、当初描いていた生活像とのギャップに苦しみ、移動や生活維持の負担を感じ、それでも通わざるを得ないという厳しい現実に向き合う人々もいる。

そんなインタビュー調査を通じて村民のみなさんのライフヒストリーやナラティブに触れる時間は、単なる「リサーチ」という営みを超えて、私自身の心を揺さぶるものとなっていた。村民の方々の生き様に触れるたび、「さて、君はどう生



村のおばあさんからいただいたおにぎり



村葛尾村の盆踊り大会の実行委員として参加する著者

きる？」と、一個人としての在り方を問いかけてられているような心地になる。

そんなモヤモヤした問いと向き合うためにまた葛尾村に通うのだろう。

## 震災から21年、木沢集落を持続可能な里山へ

地域おこし協力隊・栄養士 中林 夏希

21年前、私の故郷である新潟県長岡市川口(旧川口町)は最大震度7の激震に襲われました。当時12歳だった私は、言葉にできない恐怖と友人の死という深い悲しみを経験しました。しかし、その記憶と共に心に刻まれているのは、家族

や地域の人々と寄り添い、助け合って生きて日々の体温です。

その後、関東で栄養士として約10年働く中で、故郷の食や自然の豊かさを再認識し、Uターンを決意しました。現在は地域おこし協力隊として、母の故郷でもあ

る木沢集落を拠点に、体験交流センター「やまぼうし」の運営やイベントのサポートに携わっています。

24世帯40人が暮らす山あいの木沢集落で活動を始め、驚いたことがあります。それは高齢者の方々の圧倒的な活力と、今なお多くの若者や海外の来訪者が絶えないことです。住民との「お茶飲み」で語られるのは震災当時の記憶。道が崩れれば父たちが直し、母たちは手元の食材で炊き出しを行い、ボランティアの学生を家に泊めてもてなし

たといいます。この力強い自治の精神と、外からの支援を温かく受け入れてきた歴史こそが、今の木沢の活気の源泉なのだと確信しました。

しかし、このままでは集落の維持が困難なものも現実です。私は、先人が守り抜いた郷土料理や知恵を学び、地域の魅力を発信し続けることで、関係人口の拡大や移住支援に繋がりたいと考えています。最後に木沢の暮らしを支えてくださる全ての方へ感謝を伝えます。



## 法 制度と現場 ⑫

### 牧之原市における官民連携の被災者支援活動報告

植松 真樹 弁護士・静岡県弁護士会所属

令和7年9月5日、台風15号による竜巻で静岡県牧之原市を中心に甚大な被害を受けました。静岡県弁護士会が所属する静岡県災害対策士業連絡会は、県・牧之原市の協力のもと、発災直後の9月11日から約2ヶ月間、被災者に寄り添う相談体制を構築しました。

今回、行政と支援団体が、同じ意識を持つ仲間として密に連携し協力できた背景として、この災害の前に県が作った「被災者支援連

絡会」が、県・市と我々士業やその他の支援団体を結ぶ大きな役割を果たしました。また、牧之原市の「受援力」も素晴らしいものでありました。

これらの成果の1つとして、牧之原市では実情に即した柔軟な住家被害認定が実現しました。そして、判定に疑義がある方へは図面や点数等の認定根拠を開示し、士業ブースの建築士が即座に内容を検証。再調査の要否を専門的見地から仕

分けることで、被災者の納得感を高めつつ、不要な再申請を抑制し、行政側の調査負担も軽減できました。

また、従来は希望者のみだった士業相談を、今回は、原則罹災証明書の発行者「全員」を対象とする運用に転換しました。1日最大48件もの相談に対応するため、士業側は市と協力して独自のチェック表を作成。判定ごとに該当する支援制度や注意点、窓口番号を即座に案内し、同じ会場内

で手続きが完結する「ワンストップ体制」を確立しました。

この官民連携は、今後、同等の規模の災害支援における1つのモデルケースと言えるのではないのでしょうか。これからも被災者に必要な支援が確実に行き届くよう、この経験を大切に活動を継続してまいります。

## 味な復興 ⑫

### 遅くなった炊き出し

農家・フリーアナウンサー 魚住 由紀

「味な」のコーナー名にはそぐわない重く辛い記憶。震災から5ヶ月ちょっとたった八月、ボランティアチームに参加して東北へ炊き出しに出かけた時のことです。

仮設住宅の一角に建てたタープの下で、私は副菜の盛り付け係をしていました。あとはアツアツの鶏唐揚げを載せれば完成。ところが不慣れな私たち、揚げ物が追いつかずあたふた。

事前に戸別配布したチラシの掲載時間を大幅に越え、炊き出しに並ぶ人の列が伸びていました。「きょうは唐揚げで一す」。献立て説明で時間稼ぎをするもの間が持たなくなってきたころ、所在なげな私に、先頭で待つ若い男性が語り始めました。東日本大震災で発生した津波に巻き込まれた経験を。

「働いていた介護施設も被害に遭った。入所高齢者

の手をつなぎ一緒に逃げたけど、途中で津波に襲われて、手が離れてしまった…。衝撃的な内容でした。集会室の鍵も開いていない新しい仮設住宅では、気の置けないともだちがいなかったかもしれません。それとも、多くの人が犠牲になった被災地では日常の会話でしょうか。そんなわけはありません。名乗りあう必要もなく二度と会うこともないから、ポロッと口を

ついて出たのでしょうか。

かけることばは見つからず、黙って聞くことしかできませんでした。お待たせしたことを詫びながら配膳を終えました。

あれから15年。何とも消化できない思いは変わりません。彼は元気になっているのでしょうか。小さなチームのたった一日だけの炊き出しだけど、彼の胸のつかえを少し取り除けていればと願うばかりです。